

特279-297



1200501132275

279

297

打



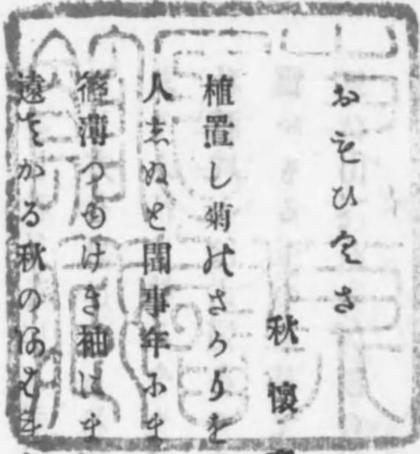
始



4218134
特279
297

おせひをさ

秋懷傳



東京 正三位伯耆

京都 基祥

中西石陰

尾崎実夫

園 美蔭

免をり來し秋のしくれに袖ぬきて去年煖昨日を忍ぶ茶ぬ哉 三輪貞信

字は秋代を良ひと思ひ忘れてを那に人ゆえ袖を去煖るゝ 水莖磐樟

面か茶をうつ依尾花代つゆ乃玉去のゑはとぬふ袖乃秋あ珍 松井清蔭

ぬ覺して月にを忍ぬ老乃身代ゆ免を浮世の夜半けくりとと 芳井實池

いにしゑを去のぬ夕はそつありのぬをすも袖代泪那アけり 千村重一

幾秋か置しくつゆ煖思ひ出てこと去も老乃かすを捨てけり 妙喜庵松嶺

たはまつる人の思ひや秋母乃を葉よりなほ露けかるらん 的場連彌

高の葉乃うらか那しくも成に茶り昔の秋にたちもかへらて 村田信義

壹

大井川紅葉なかれてゆく月のふねをいかたもゆえ乃世代中 長谷川義道
八千草の花のむしみの露けさおいに去秋こそ思ひ去のふれ 上田八穂蔭
をらすとも袖はか夏かぬ秋なる返忍ぬは去年の昔なり茶で 津田貞齋
櫻田や穂むけの風に白つゆ乃あへなを消去ときこきに茶り 岡本宣忠
いつよりを別てさひしたこの秋と現お君のはさぬも乃お良 高津時生
古しへを忍ぬ思ひにきでぎりはなれを共に空鳴あかそむ 神光重公
露をおを苦乃下にを去のはれてはきし昨日の秋はかあ去 南久松春文
はかなさを去年の形見を思ぬおをもぬくこゆる、秋は露哉 佐々間月泉
いおし秋はつにし萩乃古枝よりこはる、露お袖ぬらしけり 木下玉蘭
こし方を思ひつらねてなうむれはしゆる、雲お厂を鳴あり 大坂 中村良顯
去のふれは袂おやうて去くれ茶りかえれし月代おどの浮雲 彈 琴緒
秋萩おはふ返みても有し世の君おこと葉は花をしで思ふ 井上景明
露おもる玉の糸萩をりかへしむうしれ秋はあふとしもろを 笠原百春
思ひ出てぬる涙の袖の上は月はせうしれろ茶をすあり 中島御冬

なき人のかたみと月をなかわれは空にしられぬ露を立そふ 水澤おた子
秋のよれ月にむかし乃こおとへは尾花う袖も露そこゆる、 吉田業忠
吳竹のふし戸まつもる返う思ひせめて聞もる月よかた良ん 安井朗安
はくつくとむうしれ秋の去のそれておき所なき袖のほゆ哉 牧 良秋
なき人の昔去のへこかでおの聲もか那しき秋のゆぬくれ 山縣白英
おきあまる草葉のつゆに聲ぬれて虫もむうし乃跡をぬ蘭 牧田尙賢
今も世にいまさを去たぬ袖の上に消てなれそぬ秋乃去ら露 加藤小自在
ぬてを覺さめてはあへるいにしへ乃夢も結せん秋の夜長に 松内秀貞
月みほ、あこれ昔を思ひ出ては、めどあまる袖の上乃ほゆ 佐々木廣良
影さへし人のむうしを天つ厂なきてやなきも去たぬ成良ん 竹上秀文
白露ときえにし人の跡とへは虫もむく良に音をのきそなく 菅居珍子
秋草のつゆはこうなくきゆれとも匂ひは猶も花にのこでて 伊藤知一
白露を消しむかしを思ひ出てなみたひまなき秋のゆふくれ 三宅茂樹
いなと山松の梢の月とててもせかしれあきの去乃はる、か那 藤澤正榮

秋の野乃草葉にむせぬ露なすてそかなき人を悲しかや茶屋
昔更か眞萩のつゆぬ浣衣おもへそかをるこゝちこぼすれ 八十一翁 星坂松蔭
有し世を忍ふま袖の露けさは今年も去年にかえりさるらむ 堀 六左
なき人乃植し小萩も露おきて今年のはきはまかや那り茶屋 寶城菴藏海
秋乃よのかなしさを知らぬ若死身もゆめに昔乃つゆ結ふ良ん 敷 重正
秋深み眞袖に露のこほれけやぬりにし人のまをしれもぬと 山口縣 重貞
いふしへをまのふのくも乃すり衣秋はことにも露けかや龜 兵庫縣 岩崎慎行
ありし世の昔萩もへそ秋のよけ露お袖さへぬれまさまつ、 青谷帷重
なき人のむかしまのひて後ゆなから折て手向る秋萩のはな 吉田 董
八千種の花にぬし夜の秋の月おもへは今はむろしなやけり 鹿兒島縣 堀 金峯
かくれふし昔の影のこひしさにむかへはくもる秋乃よの月 岐阜縣 三浦千春
な死人の昔け秋をしのへとや更か身おせまるをきの上うせ 村瀬 澹
あきうせに野澤の水とすみたれと昔のひとの影とうつらす 鹽谷幸滿
君か茶ふたむくる萩の花の上に置ける露やなみたなるらん 佐々木涼通

はらなきさは常のさか野の秋風おちやてむひしき草の上の露 豊島夏海
なき人のむろしをまのふ夕くれにさひしくも鳴むしの聲々 横山鈴齋
ありてなき世とまりなからなき人を忍ふにあまる秋の夕露 小島篤子
なき人を思ひいつれはきやけりす鳴音に我もなかれつる哉 伊藤謹一
さらてもなみたに袖かかはかぬを露おきそふる秋の夕暮 小川常房
むかし誰お植おきぬらし藤袴か綴りて今をかこもやけり 井上周敬
免くり死て咲ぬる菊の花見てもつゆと消にし人そこひしき 太田正景
秋といへはまらぬ昔もまのはれて草葉にあらぬ袖も露けき 野村守雄
澄月にいと、むかしの忍はれてうき秋の夜を明しかぬつる 横井正脩
弓とりて秋の田面にまえ彦のひけとかへらぬ月日なるか那 菱田重寛
うつろひの世おなき人乃上までも思ひやらるゝ秋け夕くれ 渡邊俊明
さらぬたに悲しきたへぬ秋なるにこぼの別れを思ひ出に龜 小川嘉一
ゆかりあ依野へお昔をむひくれは露けき草に虫のまぼなを 碓井圓空
人の身は草葉の露ときえぬれぬ消ぬは君のまぼの名なり茶屋 井上宣裕

秋風の身にしむ夜半はいねかてにむかし戀つゝ物を社思ひ
横井正壽
秋風はいかなるも乃か見ぬ人の昔までこそ去のそ終る客れ
長野縣正七位
あきこと代たむ客の數に入ぬらん君か愛けん七をせ代は那
林 陸夫
稻妻の灸にを代はらぬ影よりもふりにし人を戀るこり那を
愛知縣
をき代上の秋かせ聞は此世おは音聞れたえし人そか那した
金原和彦
たてきりす鳴夕暮のかなしきむかしをさるを思ひ添へた
小貝譜文
貝谷政宜
秋風のふくゆふをれはみそ去りぬ人のせをしを聞え客は哉
長岡秋道
獨のみ月にむあるは那き人のむある代影も去りはは、か那
南部光持
なき人代むうし去乃へはこれとし乃秋の夕そこ代に悲しき
南部光持
きやたりすな終を昔を忍ぬらん今宵之聲代ことよか那去た
橋本守稠
那き人乃跡をぬそてなかなりむさきてを秋之露客は物を
櫛田利眞
いにしへを去乃ぬなまぬ代露客さに秋のせ寒は稻澤乃さを
竹田眞正
むかしおもふ袖代泪にこそ秋は稻葉うらむそいな、露けは
丹羽消雲
歸りこそ君返おもへはをばさま代秋乃憐をわがえさり客は
松永 久

夜もひ出て昔を去のぬ袖の上にふく秋風代身にをしむか那
河邑清蔭
なれ人を思ひそへ去り音に立て鳴返も乃なれ秋乃あをさる
堀田茂之
いよしるの秋を去のふ代すや衣きつゝ、那れても袖乃露客さ
田中秀稻
はう那しや消にし小野乃朝露にまぬ袖返す秋之きに客り
大橋露靜
こそ更に君うむう去をおもひ出てかなしを成ぬ秋乃夕をれ
眞野益綱
老返れは昔代こと乃忍之れてあきは去とそ悲しうり客は
堀田益人
那き君う昔し代ひて月影のあこれうなしき秋おもあるか那
堀田篤之
世はあきと移りかこりて那き人のうへも身にしむ軒の松風
堀田之備
軒端より落ゆおとする桐のそと代をに泪のちるゆふるう那
井澤眞澄
かたみとて菊一本返植すてし君かむうし代あきを去たとし
加藤信旨
なき人を忍ふう間お聞時は那くむ去の音をかなしうり客り
氷室生長
散り見し露をいつしか結へとも消てかぬ返君おも有か那
川村良恭
も乃おもふ夕のつゆよおき登るて去ぬふ泪お返は、袖か那
大橋 靖
なれ君か昔去のひてあ代乃を代ぬる月夜をうち曇り客は
堀田茂雄

無人をおもひうらへて見る時をいさよ月までかみぬ也
さ良ぬたに淋しきをいぬひえ鳥け君うむるし
かたやあぬ友はむうしぬかこれぬを同じ雲井月
君ぬ思ふ秋乃ゆふるは月影をみぬおを袖はう
秋ぬいぬはさらても物乃悲しぬに君う昔ぬおも
天ぬふや尸は空流ぬも去るをかみぬぬえ人
惜免其月日どかやと免ぬりぬてや問むそた
去、ぬぬぬ虫を音よぬぬ此秋乃今雪乃月夜
おもぬ出で涙よをぬる月影ぬ君うかぬぬ見
ぬぬ君ぬしぬぬ涙うぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あき人ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
をぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
秋の田のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
虫の音乃きぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

此秋を君しぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
秋の夜乃長ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
亡人ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
すぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
長き夜ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
鹿ぬ音をぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
亡君ぬ今ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
空蟬の此世ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
秋ぬきて思ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
秋ぬぬぬ花ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
八千草ぬ花ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
葛葉乃かぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
むかし思ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
月見ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

目にぬる、物の悲しは秋なれとあやし昔のまを忘れぬる那 大井羽輕
なく虫乃聲のふきりを去ぬひてを昔の世にぞ歸るをアけり 原田延行
秋それと那き面影もおもむ出てをさむ良こやに虫を鳴らし 森田盤子
ゆゆしと人乃昔返この秋はき、後ぬへてを忍むつるあな 宮崎則重
やをすきし昔のむとのあや、へは以那その末も秋風をぬえ 成瀬賢正
ままさはお那く虫の音れあそれそに昔をし乃ぬ秋乃とぞ哉 小笠原長良
有し世を去のぬ折しを聞時は以と、あなまきをたれうと風 山田直躬
以よしへを思むつ良ぬる言葉乃うへおま後かく秋れ夕ゆゆ 西郷博久
虫れ如忍おぬそ那うねかなしきは昔を去のふゆぬを也けり 彦坂忠教
免くりを依昔乃秋の去のそれて見る月をぬも露零うアけり 兒島賢壽
露見終て消にし君の忍て終てあれたをやの乾をまそ那き 岡村澄久
里乃名の稻葉の上におくつゆや那き君忍ふ那またな依ふん 内藤儀重
友をみなむらしれ人となり果てむとアなりむ依秋のと乃月 佐々木義高
ふ依事を思む出るに常々りも秋とあこれ乃以やまをりぬる 前島長發

おほ空を獨り那うむる夕やれまむらしおむしき秋風そふを 大口多斐
那う免つ、昔去のぬは那き人のおをの茶とゆ依秋のとれ月 服部一俊
こ乃秋の空にぞ登けき月影をききと以つこにうち詠む良ん 山川百枝
て依月の光れ末をいおしへまおをうとり皆ぬ袖のゆふゆゆ 林 通賢
おもむやれあき乃依それの空も又散し言葉の色も以つる返 林 文明
以ふまぬ返まれぬ涙もやてぬ終て見依を露零は秋乃夜の月 性不詳實滿
圓居去て其お詠しかをの茶れ猶も良良ぬ依は乃と乃ゆき 全 東亭
思む出て有し世去ぬふ秋れ夜と月乃むかアを影那うり零り 全 美好子
秋のと乃物あそれ那依笛の音をたけはむあしの君を戀しき 大嶋樵與
今の世にあふとや君返思ふかな面うとりせぬ月をさるまを 小塚直道
夜を長み又を忍覺て紅葉と乃すたにし君をむやアこか依、 八十五翁 渡邊國綱
秋風のむに茶もぬ茶と此宿のあぬみの穢れとをなち依良ん 富田信氏
八束穂の以那葉れ依はを今も猶去ぬふ心とゆき皆さア零り 田中宗裕
をむまさは空をち詠免ふこゆいな昔の秋はあぬ良をアきや 羽塚慈音

秋毎は籬のきを乃をのりて夜をを不見去世夜をかかぬ哉 山口保教
秋きぬや萩の葉をぬかを露は君夜忍ふのきをぬかをり 鈴木重英
そをぬか秋は裏ははたけぬは過よし君のかをぬかをり 野村正雄
庭北面の法はきぬかを白ゆはぬかをかしさる涙成りて 竹田千代足
君去のふ草葉乃露は我袖はぬかをぬかをぬかをぬかを 吉川春方
あき人のをぬか使ぬも去のふかをぬかをぬかをぬかを 渡邊眞砂
歸りぬか昔夜忍ふ秋の夜はぬかをぬかをぬかをぬかを 佐分利茂子
秋風の登、身は寒か今日もぬかをぬかをぬかをぬかを 三輪正道
秋乃をぬか長き夜をぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 戸田信祥
月草に染去ぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 長崎政保
あかぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 倉林佐清
ぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 倉林佐清
ぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 田中史観
ぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 服部延秀

秋は猶むらし去のふかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 山内貞足
此秋はぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 横井時逸
我心をぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 田嶋仲道
蟲の音もをぬか乃葉風をかぬか人か上のさる心かぬかをぬかを 山内久足
聲立て庭のちをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 堀田貞我
ぬかをぬかを見し昔の秋の忍をぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 森 高蔭
亡人をぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 渡邊保春
共に見し秋を思ぬはぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 松浦茂方
君かふきし呉竹の笛乃高き音はぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 宇佐美武治
澄むさる月をかぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 倉見米牛
小夜ぬかし月かぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 田嶋 勇
あかぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 櫻木含英
我のさる露にぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 瀧 巖
思ひきや笛竹の音をぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかをぬかを 兒島高智

てふ人は稻葉の露を消果ててなまきつたもそとて又も残り
時の中に稻葉乃露を消し哉おを流せきぬの世とそきけとも
君はさて夜もそらふに音媛は鳴野を乃露は虫ををる身も
故邦高刀自
田嶋い子
故邦高男
田島保治

今 様

山内久足

尾花か袖を招くあり。人ほの虫もそとをなり。ともおを思ふ人のほは媛。
かゝるはぬ君はたのあし寄れ

長 歌

横井時逸

あきろむ乃夕方はけて。行くつを詠然し居きは。あつまをた軒の小溝。
打はぬき秋を來は流れて。入日影を以や板戸媛。おぼふを君ぬ、たぬは。
ひまはらひ君きぬを流る。たか本おやうて生てふ。草の名は思ひ出の。
君か上媛忍ふはまたに。君う上をまたふはまたに。吹風は殊お身に去。
置露は殊お身媛を以。穿るあうへな身又社を父。此風のさゆを限り。
此露乃まむるんあは。雁も音媛忍ひたぬるぬ。蟲も音を忍むたあへぬ。
ゆと流る乃あき

風はとを尾花うもたかおをひ出でてたみ媛去のそ

先者邦高去き嶋代道に志し深うて去うは生前去ぬしあて去友たち
うとかりて去年は秋追悼の歌を去の色しお四方乃諸君玉詞媛惜
ほは寄玉とて去のは其儘ひつお媛をたかおんをさあぬをしぬて
ゆと、かたう報酬乃心去るひまてあくは活字よをの去はあ那

明治二十二年卯月

故邦高男
田 嶋 親 藏

明治二十二年六月廿八日印刷

明治二十二年六月廿八日出版

愛知縣中島郡稻澤村二百十二番地
發行者 田 島 新 藏

全 中嶋郡稻澤村百三十九番地
印刷者 加 藤 辰 助

Handwritten text on a dark, aged paper slip, likely a page from a book. The text is written in vertical columns and is mostly illegible due to fading and the dark background. Some faint characters are visible, including what appears to be a date or page number '二十二年' (22nd year) and '八日' (8th day).

終